

下総における古代寺院の選地動向

谷川 遼

要 旨

下総国は、国の大半を香取海が占め、かつ高地の少ないという他国とは異なる様相を呈する。本論では寺院造営の背景および、往時の民衆が寺院をどのように認識したのか、すなわち、下総国の仏教受容の在り方の一端を解明すべく、下総国に造営された寺院を「選地」および「景観」の観点から検討した。そのためまず、下総国の出土瓦、地理的特性、古代に至る歴史的背景の既往研究、また、「選地」や「景観」の観点から古代寺院を検討した既往研究を概観することで、本研究の位置付けを行った。

次に、対象遺跡に近接する寺院、終末期古墳、官衙、周辺地形といった諸属性を抽出し検討し、対象遺跡の選地傾向を類型化した。また、GISを用いて対象遺跡の可視領域を示す作業により、寺院造営の背景を検討した。

これらを検討した結果、寺院の造営時期によって選地傾向が大まかにではあるが変化することを明らかにした。しかし、民衆が寺院をどのように認識したかについては未だ検討の余地がある。

キーワード：古代寺院、景観、瓦、選地、可視領域

はじめに

本論で扱う下総国は、国の大半を香取海が占め高地が少ないなど、他地域とは異なる特異な様相を呈する。また、「龍角寺式」と呼称される瓦当文様が房総地域に広く分布するなど造寺活動も比較的盛んな地域である。

古代寺院の既往研究では、特徴的な瓦当文様の分布、文様構成の変化から豪族間の関係性を述べるものが多数を占めた。しかし、地域ごとの仏教受容の在り方を追求するには、既往研究だけでなく、ひとつの国、地域、寺院、瓦窯ごとのミクロな視点の研究（梶原2010）を行うことで、各寺院の造営背景を個別に特徴づける必要がある。このような古代寺院の造営背景を考察するために本論では「選地」に着目し「景観」的見地から検討した。そのため、本論では下総に造営された寺院と古墳・官衙・駅家といった周辺遺跡、地理的環境を「景観」的見地から検討し、東国における仏教受容の在り方の一端を論じたい。

1. 研究史

1-1. 龍角寺式軒丸瓦

588年、日本最古の本格的な伽藍を持つ飛鳥寺が造営された。飛鳥寺建立を契機として畿内では豊浦寺、四天

王寺、新堂廃寺などの造寺活動が行われた。7世紀に入ると山田寺、川原寺、紀寺、法隆寺など多くの寺院が造営され、特に山田寺、川原寺、紀寺、法隆寺で用いられた創建時の瓦当文様は東北から九州まで広く分布する。その後在地豪族により各国で造寺活動が行われ、7世紀後半までに寺院の造営数は、全国で500を超える。（森1988）

房総地域でも7世紀後半から龍角寺を初源として寺院造営が行われはじめる。龍角寺が採用された瓦当文様は山田寺式だが、この瓦当文様は下総・上総地域に、広く分布する。当該地域の瓦は、関東古瓦研究会や千葉県によって集成されている（千葉県1998）。このような集成作業をもとに、下総・上総地域の古代寺院出土もしくは採集軒瓦の精緻な系統関係が分析されている。

岡本東三は『東国の古代寺院と瓦』で、房総地域における山田寺式軒瓦、川原寺式軒瓦、紀寺式軒瓦を中心として房総地域の古代寺院の編年を行い、龍角寺出土軒丸瓦を山田寺式軒丸瓦の亜型とし、房総地域に波及する単弁八葉蓮華文を「龍角寺式」と定義した（岡本1996）。また安藤鴻基は「山田寺系」（安藤1978）、上原真人は「龍角寺系列」（上原1997）と定義するが、三者の用いた語の指すものは同一のものであるため、本論では「龍角寺式」と呼称する。岡本は、瓦当文様に「形式化」の概念を用いて房総地域の古代寺院出土

瓦の系統関係を提示する。また須田勉は、龍角寺式の分布や瓦当文様の変化と豪族の造寺活動を論じる（須田1980）。これらの研究をうけた山路直充は、接合技法と瓦当文様の分析から龍角寺式軒丸瓦の系統を5系統に分類している（山路2005）。このうち下総の古代寺院の龍角寺式軒丸瓦の系統は第1図のとおりである。

下総における古代寺院の造営年代及び軒瓦の製作年代の認識は、これからの発掘調査や研究の進展により多少の変化があるだろうが、本論では山路の明示した分類に準拠する。

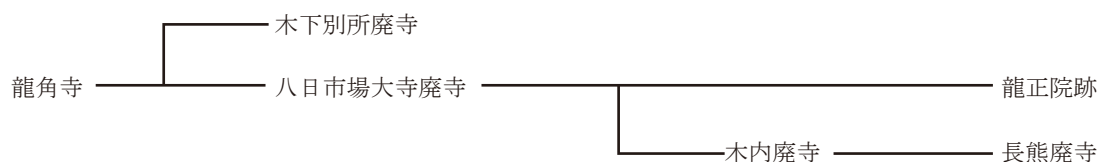
1-2. 香取海と「印波」

古来、下総国と常陸国の境界には香取海が広がっていた。そのため古代史において下総国と香取海を分けて論じることはいかなる。香取海の復原は、考古学のみならず歴史地理学や土壌学の分野からも行われているが、葦原の有無、すなわち香取海を広く定義するか、狭く定義するかをめぐる現在も議論が行われている。例えば、『千葉県の歴史』（千葉県1998）においては、白井久美子と川尻秋生が香取海を広く定義している。これに

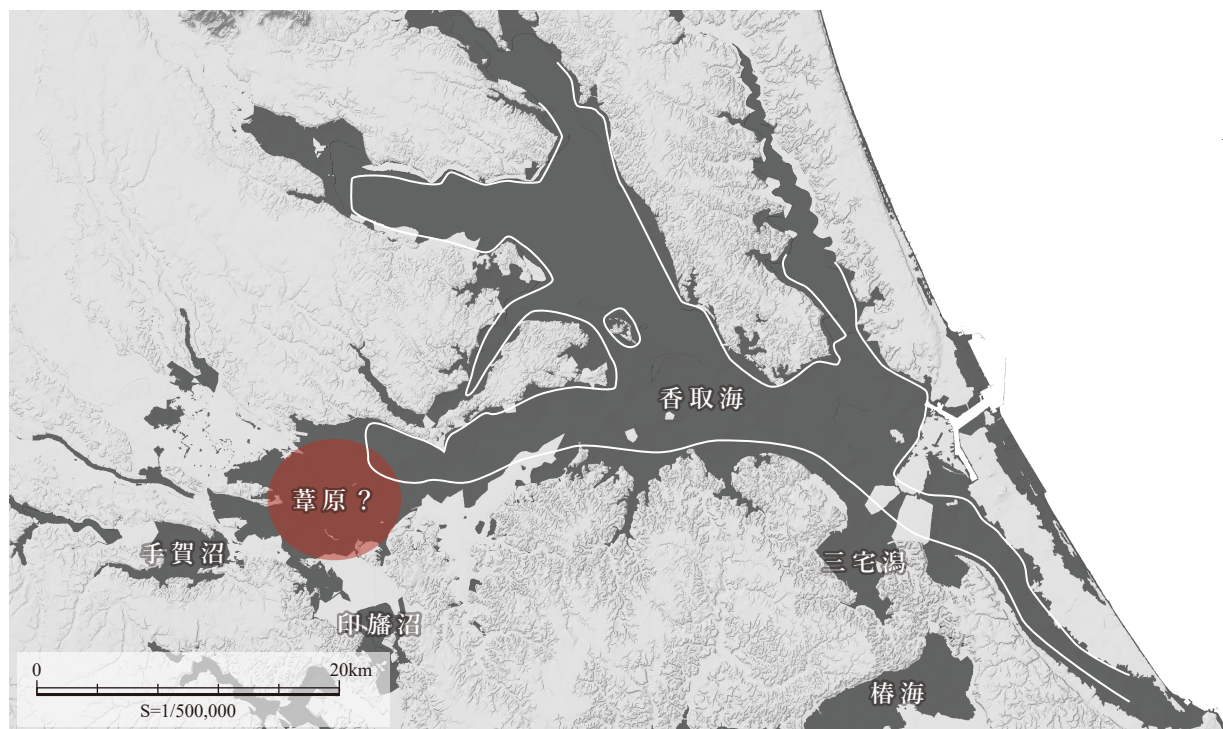
して山路は『常陸国風土記』記載史料とボーリングによる土壌調査を根拠に香取海に葦原の存在を推定し、香取海をせまく定義した（山路2009; 2017）。

現状、ボーリングによる土壌調査が多く行われているわけではないため、葦原がどの範囲で分布していたのかを知る由はない。歴史時代の香取海の復原は、土壌調査の資料増加を待つしかないが、本論では「印旛沼物語」（白鳥2014）をもとに、香取海の範囲を便宜的に、土壌に淡水過程堆積物が堆積する現在の霞ケ浦より5m低下させたところに設定する（第2図）。ただし、印旛沼や手賀沼付近は江戸時代に大規模な干拓事業が行われたため、第2図は旧地形を復原したものではないことを断っておきたい。

次に「印波」についてである。「印波」に関する論考は多数あるが、杉山晋作の「古代印波の分割」が近年の研究の出発点となる。杉山は古墳群の動向と龍角寺出土文字瓦から、印波国造支配領域が新興勢力の勃興により印波と香取に分割され、その後印波が印旛と埴生に再分割されたことを論じた（杉山1995）。川尻は杉山の論を発展させ、木簡を用いて印波国造新旧勢力について論



第1図 龍角寺式の系統図



第2図 香取海（実線は汀線）

じた（川尻2003a; b）。

山路も「印波」の分割について言及するが、香取海と印旛・手賀沼流域を別個と考えつつ、分割に王権の介入を想定する（山路2000; 2004; 2009; 2017）。

1-3. 古代寺院と官衙・道

古代寺院と地方官衙の密接な関係性は、従来から数多く指摘されている。近年、『古代東国の地方官衙と寺院』（佐藤編2017）や『日本古代の道路と景観—駅家・官衙・寺—』（鈴木ほか編2017）など、古代の交通・官衙・寺院を「景観」の観点を含め多角的に捉えた論集が出版されている。

佐藤信の「古代東国の地方官衙と寺院をめぐる課題」では、寺院造営と「天下立評」による評家成立の前後関係や、交通ネットワークにおける評家・郡家の役割、陸上・水上交通ネットワークの在り方など、今後の交通・官衙・寺院研究の課題を示唆している（佐藤2017）。また、律令体制が整備された7世紀末以降の地域・交通ネットワークだけではなく、在地が律令体制を受け入れる前段階の終末期古墳から寺院造営までの過程で地域・交通ネットワークが如何なるものであったのかについては、これから多くの検討が必要となる。

1-4. 古代寺院の景観と選地

それでは「景観」とは何であろうか。中村良夫は「景観とは人間をとりまく環境のながめにほかならない」と述べる（中村1977）。また、寺村裕史は地理学と工学における「景観論」と考古学における景観的研究をもとに「そこに表された過去の人々の景観認識（空間認識）を捉えていくこと」が景観的研究を行う上で重要であると指摘する（寺村2014）。

このことを前提に先行研究を振り返ると、古代寺院を「景観」の観点から論じた研究の嚆矢は上原真人である（上原1986）。上原は伽藍配置を、仏教儀式を行う空間構造として捉え、伽藍を「仏地」と「僧地」に区別し、時期変遷によって儀式の在り方が変化していく点を論じた。しかし、この段階ではまだ「景観」の視点は明確にされていない。その後、関東で広域的に発掘された国分寺の成果が発表されるようになり、国分寺の伽藍や附属施設の様相が明らかになった。

これらの研究をふまえて山路、網伸也が古代寺院造営の際に「景観」の観点が重視されたことをはじめて明確に指摘した。山路は、王権による統治に際して寺院がモニュメントの機能も果たしたため、寺院造営には「景観」が重視されると指摘した（山路1999）。また、網

らの景観を寺院造営に際して意識され、かつ寺院の立地が自然地形に規制されやすい点を指摘した（網2001、2006）。一方、東国では、複数伽藍を持つ寺院だけでなく、一字のみの寺院も存在する。そのため、伽藍配置のみから寺院の「景観」を論じることには、おのずと限界が存在する。

上杉和央は歴史地理学から寺院の景観と立地について、地形条件や古墳、集落、河川、寺院、官衙との距離を分析することで論じた（上杉1999）。東国のような複数伽藍を持たない寺院が多数存在する場合、寺院の立地と景観を論じる際に上杉の方法論は有効である。

古代寺院が水上交通や陸上交通の要衝に立地したことは多くの研究により指摘されている。しかし、既往研究の多くは個別遺跡のみの分析であるため、地域を包括し類型化した梶原義実の研究が注目される（梶原2017）。梶原は上総・下総を含めた8地方の古代寺院を分析し、9つに類型化している。しかし、梶原もここで述べるように各地域の遺跡分布や地形に精通しているわけではないため、一地方に対する議論は更に深める必要がある。

2. 現状と課題

古代寺院の既往研究では、単独の瓦当文様の分布、文様構成の変化から豪族間の関係性を述べるものが多数を占めた。しかし、地域ごとの仏教受容の在り方を追求するには、既往研究のマクロな視点の研究だけでなく、ひとつの国、地域、寺院、瓦窯ごとのミクロな視点の研究が必須である（梶原2010）。

古代寺院研究は、瓦などの遺物研究と、伽藍配置及び寺域を対象とする遺構研究の両輪で構成される。しかし、房総地域の古代寺院は、伽藍配置が不明確な寺院が多いため、瓦を主体とした遺物研究が先行している。そのため現状の研究は、瓦当文様系譜に、寺院造営者である豪族や畿内政権との関係を見出す政治システムの話題に終始しており、寺院を往時の民衆が寺院をどのように認識したのか、また周辺遺跡との関係性はどのようなものであったのかといった「景観」の観点からの研究は少なく、近年になりようやく盛んに論じられるようになった。古代寺院の「景観」は、寺院造営時の仏教思想や当該地域の様相を反映するため、そこには当時の社会における仏教受容と仏教信仰の様相が現れる。

7世紀後半は、律令体制の整備が進むに比例するかのようになり、全国的に寺院造営が活発化する時期である。下総も例にもれず、中央と在地の政治システムとの関わりの中で古代寺院が造営される。先行研究で瓦の精緻な系

譜関係が指摘されている一方、多くの寺院では伽藍配置が未確定であり、「景観」や「選地」の観点に基づく研究は途上であるといえる。また、上述した梶原の研究では、下総の地理的特性である香取海の問題や「印波」の分割といった下総の特異な様相に触れていない。そのため、本論では下総に造営された寺院と古墳・官衙・駅家といった周辺遺跡、地理的環境を「景観」の見地から検討し、下総における古代寺院の選地傾向の分析を行う。

3. 分析方法と対象遺跡

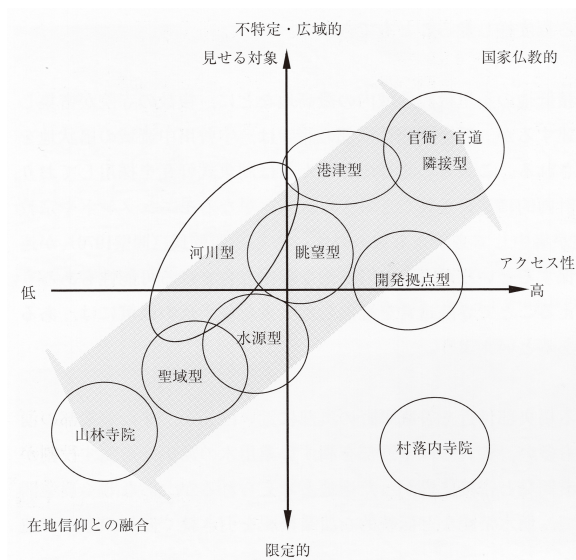
3-1. 分析方法

分析方法は上述した上杉、梶原が使用した方法を用いる（上杉1999, 梶原2017）。すなわち対象遺跡に近接する寺院、後期終末期古墳、官衙、周辺地形などの諸属性を抽出し検討することで、地域差と時期差を見出す。

また、寺院造営年代については、研究史から筆者がⅢ期に分類した（関東古瓦研究会1997, 山路2005ほか）。分類は下記のとおりである。

- ・Ⅰ期（7世紀代）：龍角寺と龍角寺から直接波及した寺院（龍角寺・木下別所廃寺・八日市場大寺廃寺）。
- ・Ⅱ期（7世紀末～8世紀第Ⅱ四半期）：Ⅰ期の寺院から波及した寺院など（木内廃寺・龍正院・長熊廃寺・千葉寺・結城廃寺）。
- ・Ⅲ期（8世紀第Ⅲ四半期～）：国分寺造営詔以降（下総国分両寺・流山廃寺・手賀廃寺・大塚前廃寺・名木廃寺・御堂廃寺）。

寺院の選地類型は、梶原の設定した9つの類型（梶原2017）を使用する（第3図）。下記では梶原の設定した類型と、その概要を示した。



第3図 梶原の寺院の諸類型

- ①官衙・官道隣接型 郡衙遺跡もしくは官道に近接して造営される寺院である。陸上交通を強く意識する。
- ②河川型 河川や湖沼といった水上交通の要衝に造営される寺院である。寺院へのアクセス性より寺院自体のモニュメント的要素が強い。
- ③港津型 港津に近接して造営された寺院である。河川型よりも公的な要素が強い。
- ④眺望型 周囲より高い場所に造営される寺院である。眺望範囲は造営者の勢力範囲であり、モニュメント的要素が強い。
- ⑤開発拠点型 扇状地や沖積低地などに寺院が集中して造営される。経済的基盤とする例が多い。
- ⑥水源型 湧水地などに選地して造営する寺院が多い。湧水祭祀や農耕祭祀を引き継ぐものと考えられる。
- ⑦聖域型 集落などからの隔絶を目的とした寺院である。自然信仰や山岳信仰と結びつくことが多い。
- ⑧山林寺院 集落や平野部から隔絶した選地をする寺院である。山岳信仰や境界信仰などとの関連性がある。
- ⑨村落内寺院 関東に多い寺院の形態である。集落と寺院が未分化であり、民間仏教との関係が強い。

また、GISを用いて終末期古墳、寺院の可視領域を示す作業によって寺院の造営背景と、往時の民衆が如何に寺院を認識したのかを検討する。

3-2. 対象遺跡

本論で扱う寺院は関東古瓦研究会主催のシンポジウム（関東古瓦研究会1997）、千葉県の実成（千葉県1998）に記載される8世紀末までに造営される寺院に準拠する。対象時期は8世紀末までとした。これは、東国では9世紀に入ると「村落内寺院」（須田1985）の造営が中心となり、瓦葺の寺院数が減少するため、本論では9世紀に造営される寺院は除外した。下総で瓦が出土する遺跡は多数あるが、上述の理由により対象遺跡は15遺跡とする。

4. 下総の古代寺院

本稿で扱う古代寺院は、8世紀末までに造営された寺院である。下総で8世紀末までに造営された寺院は合計15寺院である。各寺院の位置は第4図のとおりである。以下、15寺院を概略する。

龍角寺 埴生郡、印旛沼北東岸に張り出し、利根川によって開析された台地上に位置する、7世紀第Ⅲ四半期に造営された下総最古の古代寺院である。周辺遺跡として、南東約1.5kmに岩屋古墳、同じく南東約1.1kmにみ

そ岩屋古墳、南西約0.7 kmに埴生郡衙関連遺跡が存在するなど、古墳時代から古代にかけて、当該地域が政治的な要衝であったことがわかる。

木下別所廃寺⁽¹⁾ 印旛郡、現利根川と手賀沼の合流地点から南へ約1.3 kmの台地端部に所在する。周辺遺跡として、北西約1.3 kmに終末期古墳に位置づけられる上宿古墳、北北西約0.8 kmに本廃寺に瓦を供給していた曾谷ノ窪瓦窯跡などが存在する。

八日市場大寺廃寺 匝瑳郡、九十九里海岸北端の台地端部に所在する。7世紀第Ⅳ四半期以降に造営された古代寺院である。周辺遺跡として、北東約0.6 kmに御堂廃寺、南約1kmには青銅印や和同開珎、「斤」「千校尉」と書かれた墨書土器が出土した柳台遺跡などが存在し、古墳時代から平安時代まで多くの人々が生活していたことが窺える。

木内廃寺 海上郡、現利根川下流域南岸の台地上に所在する。周辺遺跡として、西約1.1 kmに本廃寺に瓦を供給していた清水堆瓦窯跡、同じく西約1.8 kmに海上郡家推定地の内野遺跡が存在する。本廃寺は海上郡の中心地域だったと考えられている。

長熊廃寺 印旛郡、長熊廃寺は高崎川中流域の台地南端部に位置する、8世紀前半に造営された古代寺院である。周辺遺跡として、南西約0.5 kmに8世紀以降だと思われる竪穴住居跡が検出され、印旛郡家推定地とされる高岡遺跡群、北西約1.5 kmに寺銘のある墨書土器が検出された将門鹿嶋台遺跡、南約1.6 kmに瓦塔が出土した六拾部遺跡が存在する。

結城廃寺 結城郡、結城廃寺は関東平野北部、結城台地上の鬼怒川右岸に位置する、八世紀第Ⅱ四半期に造営された古代寺院である。周辺遺跡として、北約3kmに官衙遺跡もしくは豪族居館遺跡と思われる峯崎遺跡、同じく北側約1.5 kmに造営された結城市最大級の古墳群である林・備中塚古墳群、北東約0.5 kmに本廃寺に瓦を供給していたと考えられる結城八幡瓦窯跡が存在する。

龍正院跡 香取郡、現利根川下流域の下総台地上に所在する。周辺遺跡として、南東約0.3 kmに本廃寺に瓦を供給していたと考えられる龍正院瓦窯跡、同じく南東約4.6 kmに本廃寺と同范である軒丸瓦が出土した名木廃寺、北東約3kmに古墳時代の玉作遺跡である大和田玉作遺跡群が存在する。

千葉寺 千葉郡、千葉寺は都川と村田川の間に挟まれた台地上に位置する、8世紀第Ⅱ四半期に造営された古代寺院である。周辺遺跡として、南西約0.9 kmに蘇我氏との関係が指摘される蘇我比咩神社、南東約1.3 kmに畿内産土師器が大量に出土し、千葉国造大私部直一族の居館もしくは千葉郡家と考えられている大北遺跡が存在す

る。

御堂廃寺 匝瑳郡、九十九里海岸北端の台地縁辺に所在する。8世紀中ごろに造営された古代寺院である。周辺遺跡として、南東約0.6 kmに八日市場大寺廃寺、南約3.5 kmに終末期古墳である関向古墳などが存在する。

下総国分尼寺 葛飾郡、現江戸川下流域東岸の台地上に所在する。周辺遺跡として、西約0.2kmに下総国分寺西瓦窯推定地、南東約0.4kmに下総国分僧寺、同じく南東約0.7kmに下総国分寺東瓦窯、南東約0.8km付近に下総国府推定地が存在する。

下総国分僧寺 葛飾郡、現江戸川下流域東岸の台地縁辺に所在する。周辺遺跡として、東約0.3 kmに下総国分寺東瓦窯、北西約0.4 kmに下総国分尼寺、約0.6 kmに下総国分寺西瓦窯推定地、西約1km付近に下総国府推定地が存在する。塔の軸線と金堂・講堂の軸線の傾きが異なるため、塔を先行して造営し、後に金堂・講堂を造営した。

流山廃寺 葛飾郡、現江戸川が開析した台地上に所在する。周辺遺跡として、東約0.2 kmに奈良・平安期の住居跡が多数検出された平和台遺跡、北約0.5 kmに奈良・平安期の住居や掘立柱建物跡が確認された加地区遺跡群などが存在する。

名木廃寺 香取郡、現利根川下流域の下総台地上に所在する。周辺遺跡として、北西約4.6 kmに龍正院跡、同じく北西約4.3 kmに龍正院瓦窯が存在する。

手賀廃寺 相馬郡、現手賀川南部の台地縁辺に所在する。周辺遺跡として、本廃寺から西約400mの地点に原氏の居城であった中世の城址である手賀城跡、北西約4.3kmに手賀沼周辺最大の前方後円墳である水神山古墳などが存在する。

大塚前廃寺 印旛郡、印旛沼と手賀沼の分水嶺にある東西に長い台地のほぼ中央に存在する。周辺遺跡として、北西約5.6 kmに手賀廃寺、北東約6.2 kmに七層2基に復元できる瓦塔が出土した馬込遺跡などが存在する。

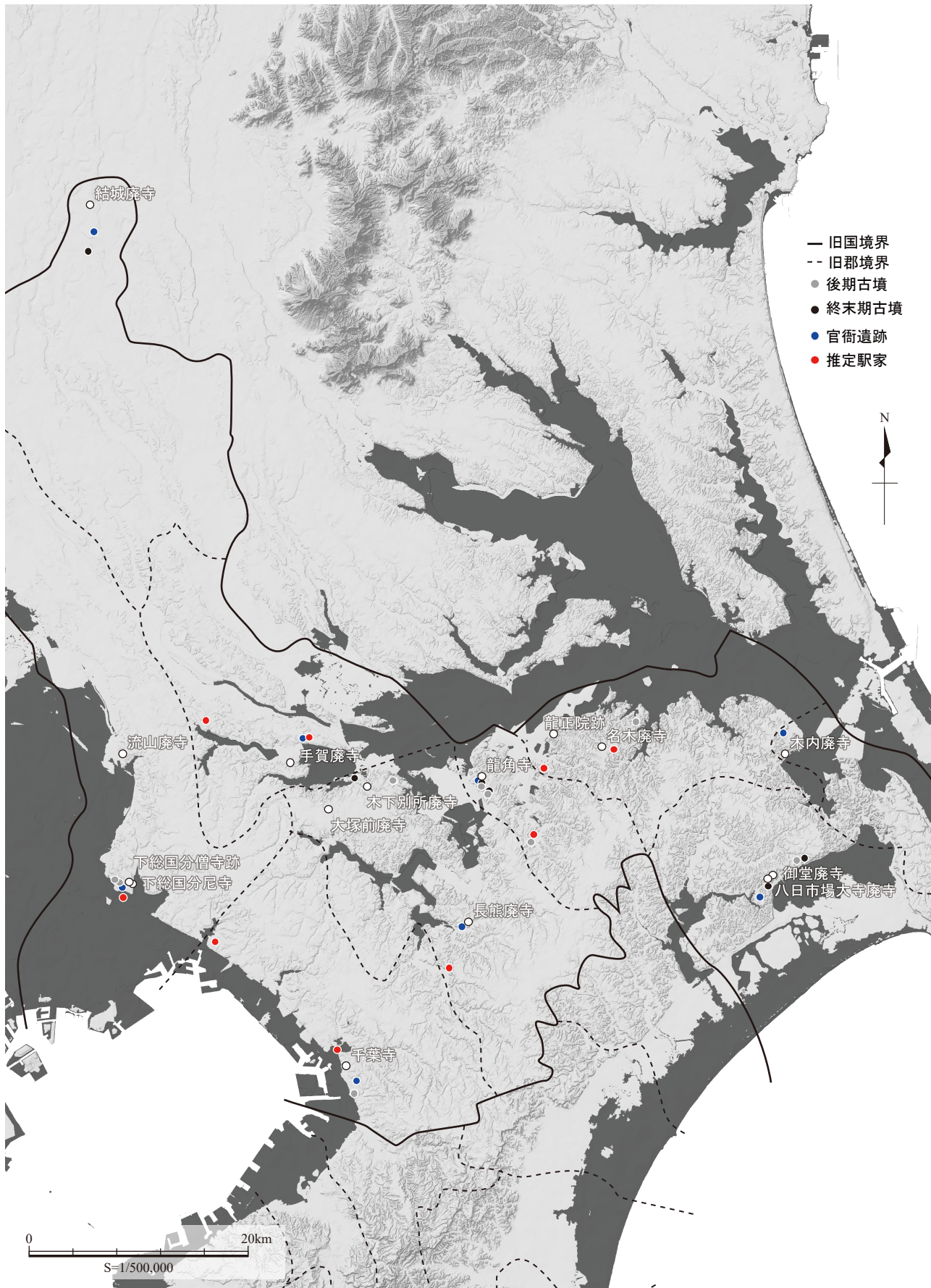
以上、地理的環境と周辺遺跡の観点から15遺跡について概観した。各寺院の遺構と出土瓦は第1表、第5図にまとめた。

5. 分析

5-1. 寺院の分布分析

まず分析方法で提示した、瓦当文様から分類したⅠ期からⅢ期の各寺院と、周辺環境および周辺遺跡の分布について検討する。

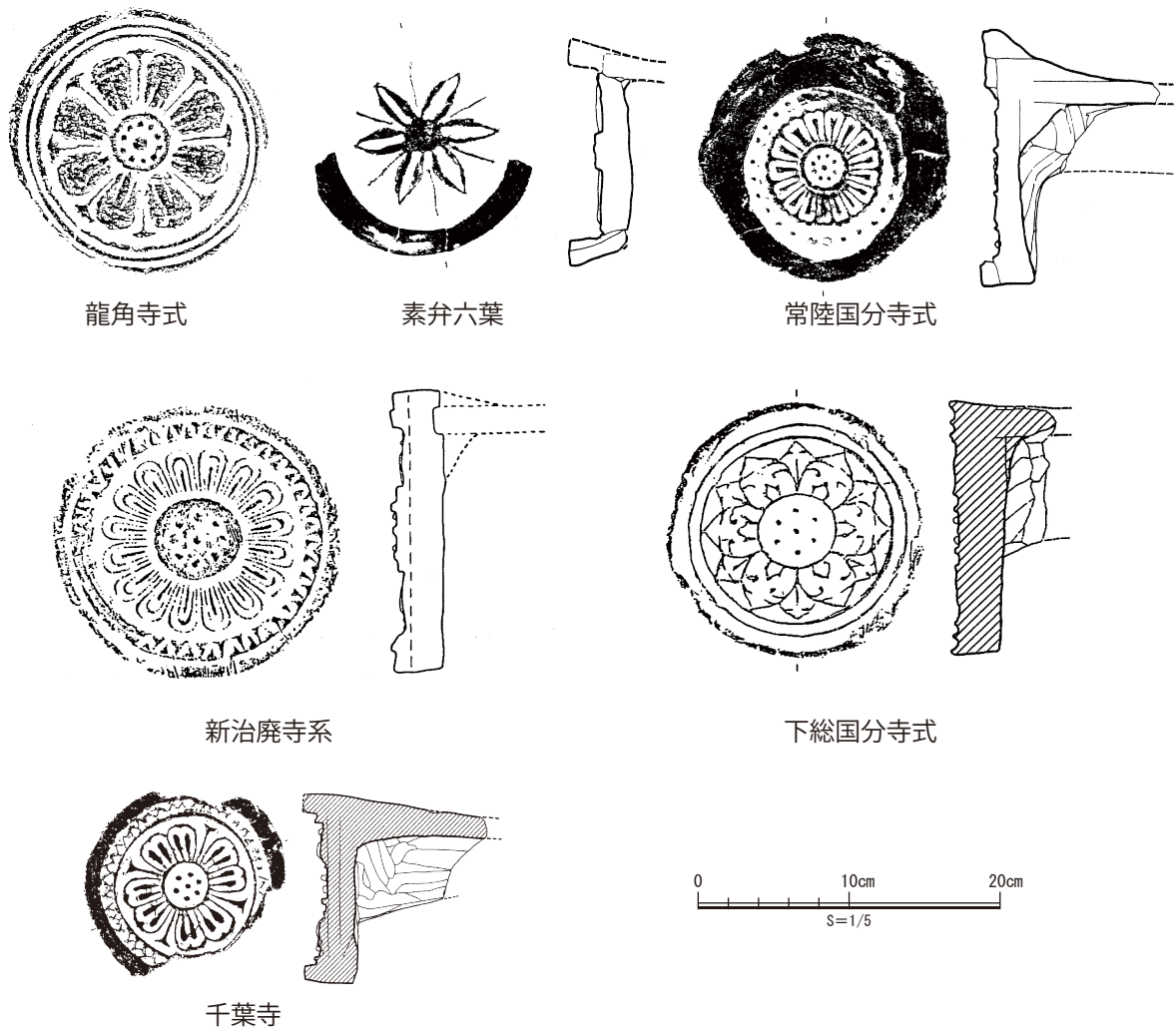
Ⅰ期：龍角寺は終末期古墳である浅間山古墳、岩屋古墳が近接する。木下別所廃寺は終末期古墳の上宿古墳が



第4図 寺院位置

第 1 表 _ 古代下総寺院伽藍配置と出土瓦

寺院名	造営年代	属性	地形	旧郡名	伽藍配置	I・II期			III期		
						龍角寺式	複弁	その他	下総 国分寺式	常陸 国分寺式	その他
龍角寺	7 III	寺院	台地	埴生	法起寺式	○		葡萄唐草文軒平瓦			
木下別所廃寺	7 IV	寺院	台地端部	印旛	法起寺式か	○		凸面布目平瓦			一枚作り平瓦
八日市場大寺廃寺	7 IV	寺院	台地端部	匝瑳	基壇一基	○				○	素弁 6 葉
木内廃寺	7 末	寺院	台地	海上	基壇一基	○				○	素弁 6 葉
長熊廃寺	8 前半	寺院	台地端部	印旛	基壇一基	○		一枚作り平瓦？ /唐草文		○	
結城廃寺	8 II	寺院	台地	結城	法起寺式		○	新治廃寺系 (複弁)			○
龍正院跡	8 II	寺院	台地	香取	不明	○			○		
千葉寺	8 II	寺院	台地	千葉	不明		○				
御堂廃寺	8 中ごろ	寺院	台地縁辺	匝瑳	掘立柱建物						平瓦出土
下総国分尼寺	8 III	寺院	台地	葛飾	国分尼寺式				○		○
下総国分僧寺	8 III	寺院	台地縁辺	葛飾	法起寺式				○		○
流山廃寺	8 後半	寺院	台地	葛飾	土壇状の高まり				○		
名木廃寺	8 後半	村落寺院	台地	香取	基壇一基のみ	○					
手賀廃寺	8 末	寺院	台地縁辺	相馬	不明						○
大塚前廃寺	8 末	村落寺院	台地	印旛	掘立柱建物				○		



第 5 図 軒丸瓦拓影図

近接する。八日市場大寺廃寺は終末期古墳の関向古墳が近接する。各寺院ともに近接した場所に終末期古墳が所在することがわかる。龍角寺と八日市場大寺廃寺は、後期古墳も近接しているため、古墳時代後期からの水上交通を支配した勢力が寺院を造営し、水上交通を支配したものと考えられる。またⅠ期の寺院は全て龍角寺式の瓦当文様を採用している。

Ⅱ期：Ⅱ期に造営された寺院は、全て駅家もしくは郡家に近接する。特に長熊廃寺、千葉寺、結城廃寺は駅家と郡家の両方に近接する。木内廃寺は、当寺院から2kmほどに海上郡家推定地の内野遺跡や御座ノ内遺跡があるが、海上郡家であると確定はしていない。龍正院跡は、香取海及び駅家である眞敷駅に近接して造営される。また、長熊廃寺は、終末期古墳の墨小盛田古墳や、印旛郡家関連遺跡と推定される高岡遺跡群、鳥取駅に近接する。千葉寺は終末期古墳の荒久古墳、河曲駅、千葉郡家に比定される大北遺跡が近接する。結城廃寺は、終末期古墳の長方墳である須久保古墳、結城郡家に比定される峯崎遺跡が近接する。Ⅱ期に造営された寺院の特徴として、駅家や郡家に近接して選地される点が挙げられる。寺院の造営と駅家、郡家のどちらが先に造営されたかについては判断できないが、律令体制の整備及び陸上交通の発達により寺院が駅家や郡家に近接して造営された、もしくは、駅家や郡家が寺院に近接して造営されたと考えられる。

Ⅲ期：Ⅲ期に造営された寺院は、国分寺造営詔以降に造営された寺院である。流山廃寺から下総国分寺と同範の宝相華文が採集されているため、国分寺に関係の深い仏教関連施設、いわゆる別院もしくは村落内寺院の可能性がある。大塚前廃寺は集落内に所在することから、村落内寺院であると推定できる。名木廃寺で確認されているのは、龍正院跡と同範の軒丸瓦1点の表採のみであり、集落内に所在することから、龍正院跡と関係性の深い村落内寺院であったと推定できる。大塚前廃寺と名木廃寺は、既往研究でも指摘される通り、寺院と集落が未分化であった村落内寺院と考える。御堂廃寺は八日市場大寺廃寺に関連して造営された仏教関連施設の可能性がある。このようにⅢ期では、Ⅰ期やⅡ期に造営された寺院とは異なる形態の寺院も認められるようになり、下総内で民衆の仏教受容の在り方が多様化したことがわかる。

5-2. 可視領域の分析

可視領域の分析については、ArcGISソフトを使用する。可視領域は、①地表から1mに設定、②地表から10mに設定、③地表から20mに設定、の3段階を設定す

る。分析を3段階設定したのは、塔などの複数伽藍の有無で可視領域が変化するかを検討するためである。

①地表から1mに設定（第6図）

Ⅰ期：龍角寺、木下別所廃寺は周囲をほぼ視認できない。八日市場大寺廃寺は、ところどころ可視領域が障害物によって遮断されるが、樺海側に可視領域が広がるといってよいだろう。

Ⅱ期：木内廃寺は三宅潟のほぼ全域を可視することが可能である。龍正院跡と長熊廃寺は、周囲をほぼ視認できない。千葉寺は、寺院の西側に可視領域が広がる。また、結城廃寺は結城台地上に造営されるが、地表から1mの可視性は高くない。

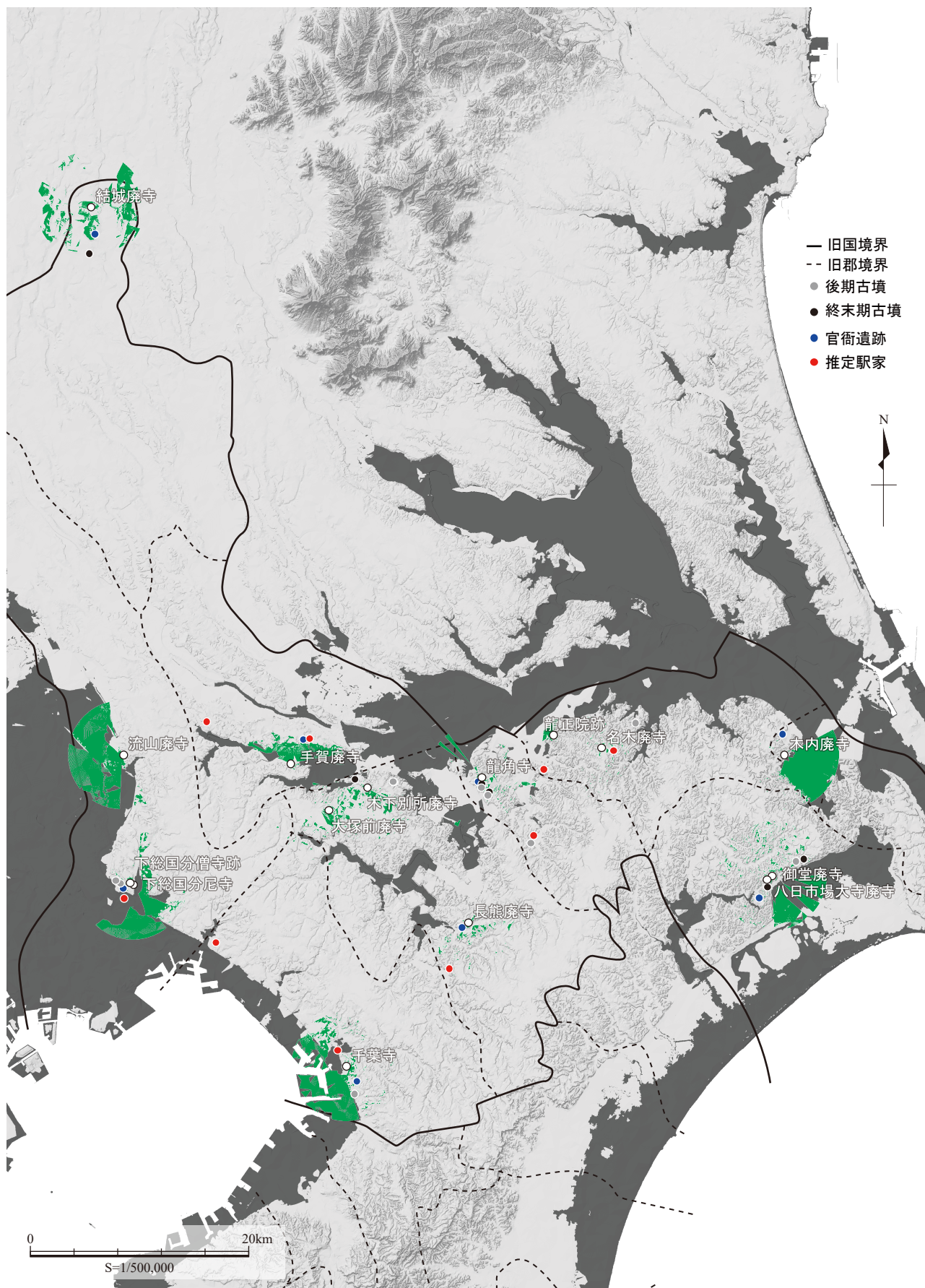
Ⅲ期：下総国分僧寺および下総国分尼寺はほぼ同じ可視領域である。手賀廃寺は北部に位置する手賀沼を視認できるが、当寺院周辺に位置する丘陵により、可視領域は限定的である。流山廃寺は、寺院西側のほぼ全域を視認できる。大塚前廃寺、名木廃寺は周囲をほぼ視認できない。御堂廃寺はⅠ期に造営された八日市場大寺廃寺と似た可視範囲を示す。

②地表から10mに設定（第7図）

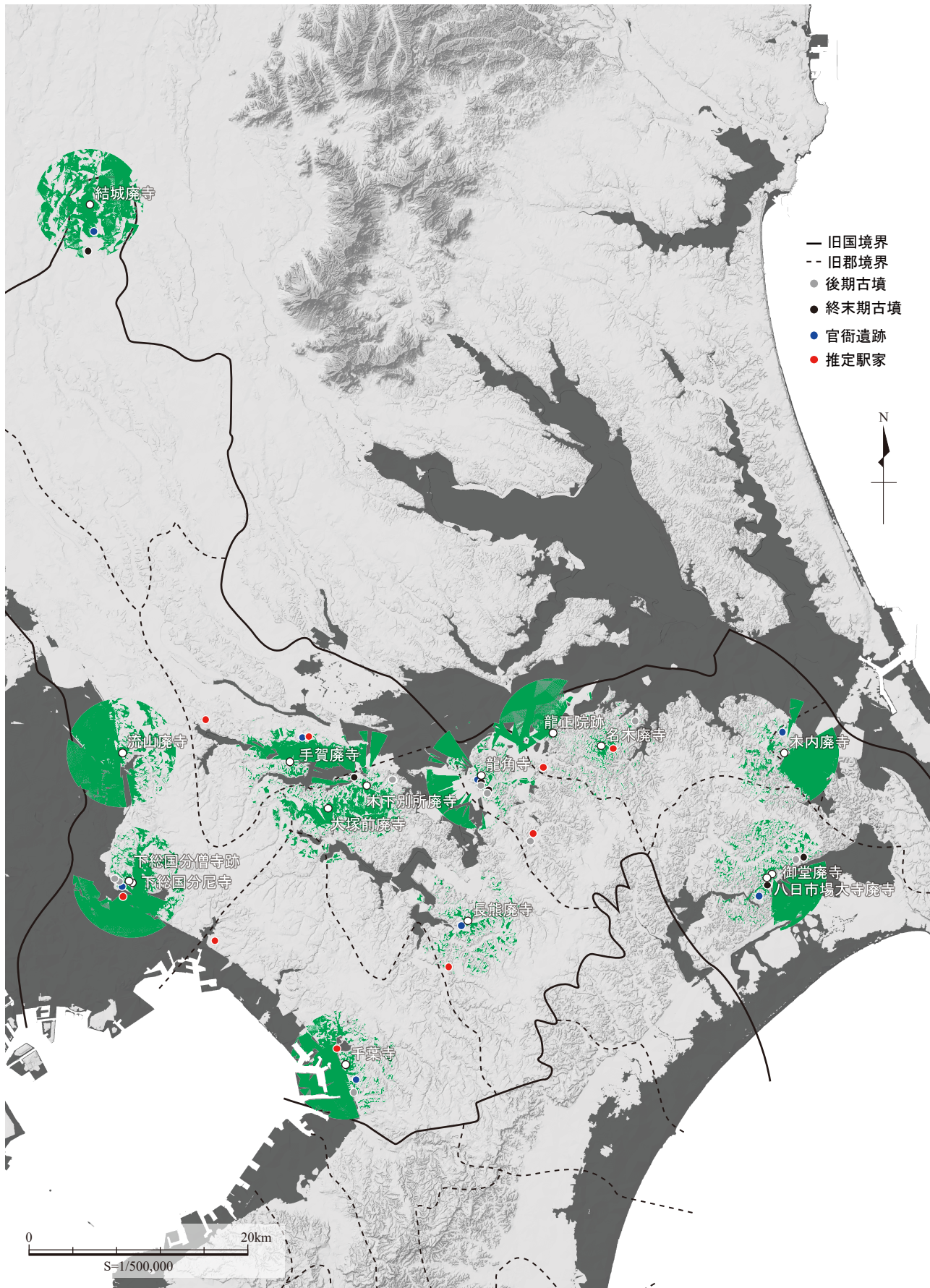
Ⅰ期：龍角寺は、北西～南側すなわち印旛沼の一部を視認できる。また、浅間山古墳と岩屋古墳を視認することはできないが、埴生郡衙は視認できる。木下別所廃寺は西側すなわち手賀沼及び香取海と手賀沼の結節点周辺が可視範囲であるが、終末期古墳の上宿古墳は可視できない。八日市場大寺廃寺は、①段階での分析結果より若干可視領域が広がるが、やはり樺海側に可視領域が広がる。また、終末期古墳の関向古墳、御前鬼塚古墳と匝瑳郡衙推定地は可視できない。

Ⅱ期：木内廃寺も①段階での分析結果より可視領域が広がり、三宅潟全域を可視することができる。龍正院跡は、北西すなわち香取海を可視することができる。長熊廃寺は、①段階での分析結果より可視領域は広がるが、可視性が高いとはいえない。千葉寺は、西側すなわち現在の東京湾、東海道が可視領域となる。結城廃寺は、①段階での分析結果とはうって変わり、周辺を広く可視できる。しかし、終末期古墳である須久保塚古墳は視認できない。

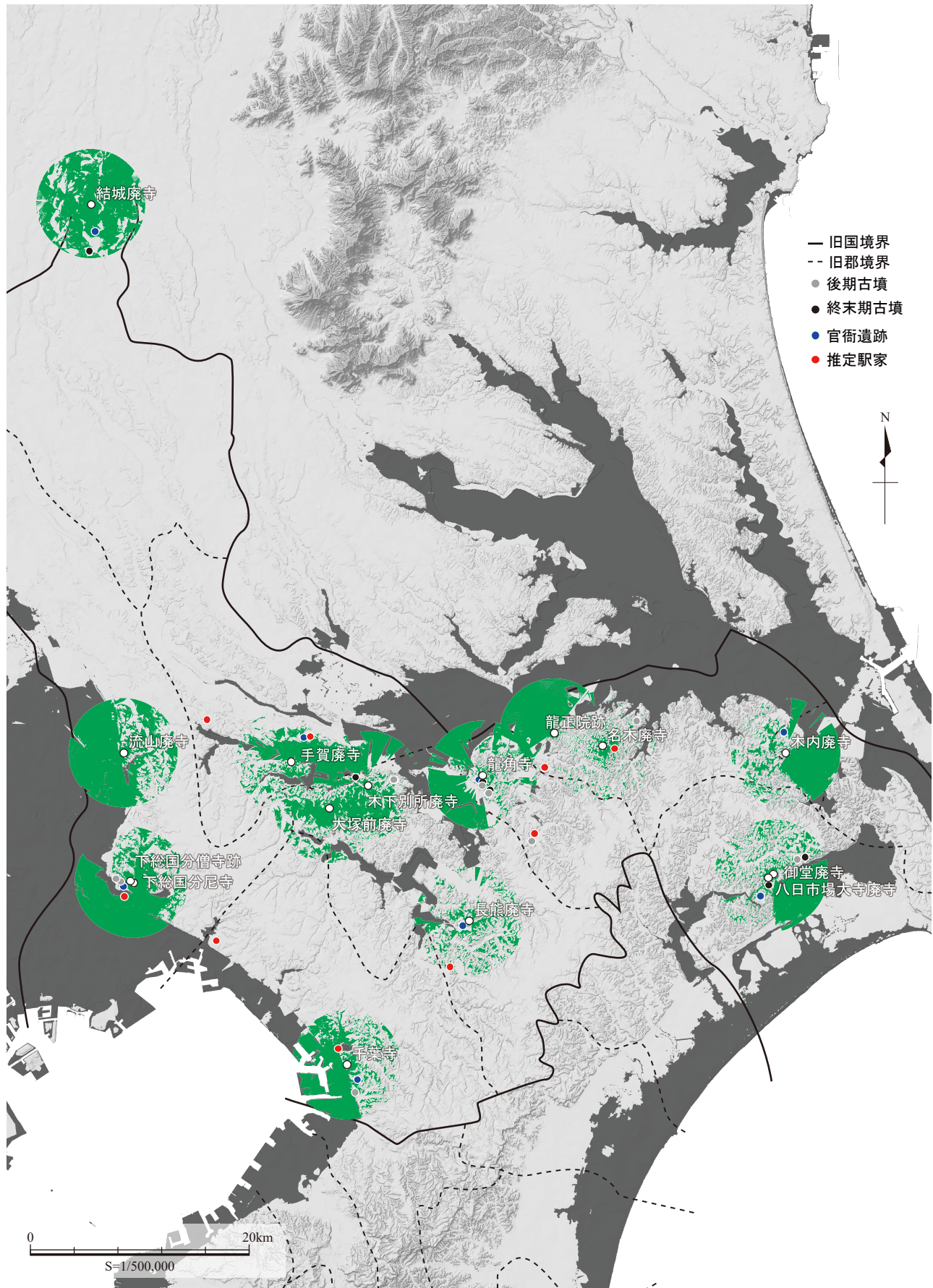
Ⅲ期：下総国分僧寺および下総国分尼寺の可視領域は①段階よりも広がり、北西部以外の周辺を広く可視できる。手賀廃寺の可視領域は、①段階より広がるが、ほぼ同じ範囲である。流山廃寺は①段階の可視範囲に加えて、東側の一部を可視できるようになる。大塚前廃寺は北部を手賀沼南部の丘陵によって遮られるが、東西方向



第6図 寺院可視領域（地表から1m）



第7図 寺院可視領域（地表から10m）



第8図 寺院可視領域（地表から20m）

に広い可視領域を持つといえる。名木廃寺は①段階より可視領域は広がるが、可視性が高いとはいえない。御堂廃寺は、Ⅰ期に造営された八日市場大寺廃寺とほぼ同じ可視領域を示す。

③地表から20mに設定（第8図）

Ⅰ期：龍角寺は②段階の可視領域に加え、北部も可視できるようになる。また浅間山古墳を可視できる。木下別所廃寺は②段階の可視領域に加え、手賀沼東部および終末期古墳の上宿古墳が可視可能となる。八日市場大寺廃寺は②段階の可視領域より若干広がるが、基本的には同じであると考えてよいだろう。

Ⅱ期：木内廃寺は②段階と大きな変化はなく、三宅潟全域に視界が広がる。龍正院跡、長熊廃寺、千葉寺に関しても可視領域は②段階と大きく変化しない。結城廃寺は②段階より可視領域が更に広がり、終末期古墳の須久保塚古墳も可視領域に含まれるようになる。

Ⅲ期：Ⅲ期に造営された寺院は②段階より可視領域は広がるが、大きく異なる点はないといえる。

6. 考察

6-1. 可視領域

5-2で3段階に分けて可視領域の分析を行った。ここで、第1表で示した現段階で判明している伽藍配置と、可視領域を合わせて考えると、塔を持たない寺院を①段階、塔を持つ寺院を②・③段階とできる。各段階の寺院を下記に示す。

①段階（第6図）：木下別所廃寺¹、八日市場大寺廃寺、木内廃寺、長熊廃寺、御堂廃寺、流山廃寺、名木廃寺、大塚前廃寺。

②段階（第7図）・③段階（第8図）：龍角寺、結城廃寺、下総国分尼寺、下総国分僧寺。

不明⁽²⁾：龍正院跡、千葉寺、手賀廃寺。

各寺院の可視領域については上記で示した段階の結果を使用し、各期考察する。また、不明については、①段階と②・③段階の両者ともに考察する。また、梶原の検討した寺院の選地類型および、筆者が検討した選地類型は第2表に示した。

Ⅰ期：下総で最も早く造営された寺院は、龍角寺である。龍角寺の造営年代は、先学諸氏によって諸説提示されているが、7世紀第Ⅲ四半期に造営の画期があるということによって一致をみている。現段階で、下総内では龍角寺が最も早く造営されるが、龍角寺は如何なる場所に選地されたのであろうか。可視領域から（第7図）、北西から南すなわち印旛沼を志向⁽³⁾していることがみてとれる。このことから、龍角寺造営者は印旛沼を中心とした香取海の水上网ワークを意識した可能性が高い。また、塔から印旛沼を眺望することが可能であるが、眺望を意識して造営したかどうかについては確定的ではない。木下別所廃寺は、可視領域より（第6図）、周囲からほぼ視認できない。これは、寺院の性格から外界と寺院を画す必要性があったためだと考えられる。また木下別所廃寺には、龍角寺と共通する龍神信仰⁽⁴⁾が存在しており、龍角寺に関係する山林寺院であった可能性も考えられる。また、木下別所廃寺は複数伽藍ではあるが、塔跡が確認されていない。塔が存在していたと仮定すると、木下別所廃寺は第7図の可視領域から「河川型」である可能性も指摘できるが、現段階では「聖域型」が最も蓋然性が高い。八日市場大寺廃寺は可視領域より（第6図）、樁海を志向して造営された蓋然性が高い。また、樁海から八日市場大寺廃寺を視認することも可能であるため、モニュメント性の強い「河川型」にもあてはまる。

Ⅱ期：木内廃寺は三宅潟を志向している（第6図）。木内廃寺も八日市場大寺廃寺と同様の選地傾向といえ

第2表 下総寺院の諸属性および類型

時期	寺院名	後期古墳	終末期古墳	官衙	駅	集落	寺院	梶原類型	類型
Ⅰ期	龍角寺	○	岩屋	○				官衙官道隣接	眺望？、河川、官衙官道隣接
	木下別所廃寺		上宿					水源・聖域	眺望？、河川
	八日市場大寺廃寺		関向				○	眺望	眺望、河川、官衙官道隣接
Ⅱ期	木内廃寺			推定				眺望・官衙隣接？	眺望、河川、官衙官道隣接
	龍正院	○			○			眺望・河川	開発拠点、官衙官道隣接
	長熊廃寺		墨小盛田		○			官道隣接・眺望・河川	官衙官道隣接
	千葉寺		荒久		○			眺望？・官衙隣接？	官衙官道隣接
	結城廃寺		須久保	○	推定			河川？・眺望？	官衙官道隣接
Ⅲ期	国分僧寺	○		○	○			官衙官道隣接・眺望	官衙官道隣接
	国分尼寺	○		○	○			官衙官道隣接・眺望	官衙官道隣接
	手賀廃寺							未検討	眺望
	流山廃寺							眺望・河川・村落内寺院	開発拠点、寺院関連施設？
	大塚前廃寺							山林寺院？・水源？	村落内寺院
	名木廃寺	○			○			水源・聖域	村落内寺院、寺院関連施設？
	御堂廃寺	○	関向				○	眺望	寺院関連施設？

る。龍正院跡は、現段階で伽藍が不明であるため確定的ではないが、龍正院跡に塔が存在した場合は、香取海を志向して造営された可能性が高いため、「眺望型」である（第7図）。また、龍正院跡に塔が存在しない場合は、周囲からほぼ視認できない（第6図）。この場合は在地信仰との結びつきから龍正院跡が造営されたと考えられ、「水源型」とできる。長熊廃寺、千葉寺、結城廃寺は周辺遺跡の分布から「官衙官道隣接型」である可能性が高い。

Ⅲ期：下総国分尼寺、下総国分僧寺は典型的な「官衙官道隣接型」であるといえる。手賀廃寺は塔の有無関わらず、手賀沼を志向して造営されたと考える。そのため「眺望型」である蓋然性が高い。流山廃寺は下総国分寺式の軒瓦が出土しているため、下総国分寺との関係を考えられる。そのため、寺院関連施設である蓋然性が高い。流山廃寺から出土する瓦は複数伽藍を想定できるほどの量ではないため、一字であったと考えられる。また、可視領域は（第6図）、現東京湾側に向いており、西側に低地が広がるため、「開発拠点型」であった可能性もある。大塚前廃寺は可視領域より（第6図）、周囲をほぼ視認できない。かつ、周囲で集落が確認されている。そのため大塚前廃寺は東国に多く存在する村落内寺院である可能性が高い。名木廃寺も周囲からほぼ視認できない（第6図）。このことから名木廃寺は大塚前廃寺と同様に村落内寺院の可能性が高い。また、名木廃寺から出土する瓦は龍正院跡出土の製品と同范であることから、龍正院に関連する形で造営された、寺院関連施設の可能性もある。御堂廃寺は八日市場大寺廃寺と同様の可視領域を示す（第6図）。このことから御堂廃寺は八日市場大寺廃寺に関連する形で造営された寺院関連施設であるといえる。

6-2. 選地傾向

I期の寺院は後期古墳、終末期古墳を造営した勢力が寺院を造営し、水上ネットワークの要衝を支配したと考えられる。またI期の寺院とII期の木内廃寺は個々の河川を志向して寺院の選地を行った蓋然性が高い点は興味深い。特に、龍角寺が印旛沼を志向して選地されたことと「印波」の分割は密接に関係すると考える。その後、木下別所廃寺を除くI期の寺院の周辺には、郡家が造営される。また、II期以降に生産された瓦も確認されていることから、I期に造営された寺院は律令体制下でも宗教的機能を存続させていたことがわかる。

II期の寺院は水上ネットワークのみでなく、陸上ネットワークすなわち東海道が整備された結果、交通と役所の双方、少なくともどちらかに近接して造営されてい

る。律令の整備と寺院の造営が密接に関わった時期である。ただ、選地傾向としては、II期に造営された寺院の多数が終末期古墳に近接しており、I期に造営された寺院との近似性が強いといえる。

I期II期の寺院はともに交通ネットワークの要衝に成立するのに対し、III期の寺院の選地傾向は、すでに造営された寺院の別院や村落内寺院といった、民衆の多様な仏教受容の在り方を反映していると考える。既往研究で指摘されているとおり、仏教の階層性を容易に把握できるようになるのはIII期以降である。

おわりに

本論は古代下総における仏教受容の在り方を解明すべく、景観論の見地から、下総における古代寺院の選地傾向を考察した。

本論では下総の寺院造営をIII期に分け、各期の特徴と変遷、すなわち水上ネットワークから陸上ネットワークへと変化し、更にこの変化に付随するように寺院の選地傾向も変化することを指摘した。従来から古代寺院が交通の要衝に造営され、水上交通から陸上交通へと重要度が変化することは理解されていたが、本論では視覚的に明示できた。また、GISの可視領域を使用することで、従来の景観論研究より客観的な根拠を示すことができた。また、GISによる可視領域計算により、龍角寺が印旛沼を志向して造営された蓋然性が高いことを指摘した。これは香取海復原及び印波の分割を研究するに際して、重要な指摘であると考えられる。

また、本論の結果は、梶原（2017）が検討した結果と若干異なっている。これは香取海の復原と可視領域を分析に導入したことから生じたものと思われる。今後は、香取海の精確な復原、本論では論点としなかった集落や火葬墓、畿内産土師器や緑釉陶器といった諸属性を含めて検討する必要がある。また、下総と東国の他地域との比較も今後の課題となろう。

謝辞

本論文の作成に至っては、指導教員である早稲田大学文学学術院・城倉正祥准教授からご指導とご助言を賜った。また、早稲田大学考古学研究室の諸兄にはご協力とご助言を賜った。深く御礼申し上げる。

註

- (1) 木下別所廃寺は、発掘調査から複数の伽藍が確認されたが、塔心礎が確認されず、瓦塔を据え付けていた可能性が指摘されている。

- (2) 龍正院跡および千葉寺は、基壇が未検出である。
- (3) ここでいう「志向」は、寺院造営者がどの場所を意識して寺院を造営したのかという、精神的な意味合いも含む。これ以降の「志向」に関しても、同様の意味合いを含む。
- (4) 龍と水と山林寺院については、井上一稔（2016）も指摘している。

引用文献

- 網 伸也 2001「畿内における在地寺院の様相」『古代』110、早稲田大学考古学会。
- 網 伸也 2006「景観の見地からの伽藍配置」『考古学ジャーナル』545、ニューサイエンス社。
- 安藤鴻基 1978「木下別所廃寺出土古瓦の系譜」『木下別所廃寺第二次発掘調査概報』千葉県教育委員会。
- 安藤鴻基 1980「房総7世紀史の一姿相」『古代探叢』早稲田大学出版部。
- 井上一稔 2016「室生寺からみた古代山寺の諸相」『日本の古代山寺』高志書院。
- 上杉和夫 1999「飛鳥・白鳳期における寺院の立地について」『史林』82-6、史学研究会。
- 上原真人 1986「仏教」『岩波講座 日本考古学4 集落と祭祀』岩波書店。
- 岡本東三 1996『東国の古代寺院と瓦』吉川弘文館。
- 梶原義実 2010『国分寺瓦の研究』名古屋大学出版会。
- 梶原義実 2017『古代地方寺院の造営と景観』吉川弘文館。
- 川尻秋生 2001「大化の改新と房総」『千葉県の歴史 通史編 古代2』千葉県。
- 川尻秋生 2003a「『香取海』の水上交通」『古代東国史の基礎的研究』塙書房。
- 川尻秋生 2003b「大生部直と印波国造」『古代東国史の基礎的研究』塙書房。
- 川尻秋生 2009「古代房総の国造と在地一印波国造と武射国造を中心に一」『房総と古代王権一東国と文字の世界』高志書院。
- 関東古瓦研究会 1997『関東の初期寺院 資料編』。
- 木下 良 2009『事典 日本古代の道と駅』吉川弘文館。
- 佐藤 信編 2017『古代東国の地方官衙と寺院』山川出版社。
- 白鳥孝治 2014『印旛沼物語』印旛沼流域水循環健全化会議・千葉県。
- 杉山晋作 1995「古代印波の分割」大川清先生古稀記念会編『王朝の考古学』雄山閣出版。
- 須田 勉 1985「平安初期における村落内寺院の存在形態」『古代探叢』II、吉川弘文館。

- 須田 勉 1986「古代地方豪族と造寺活動」『古代探叢』I、吉川弘文館。
- 須田 勉 2013『日本古代の寺院・官衙造営』吉川弘文館
千葉県史料研究財団1998『千葉県の歴史 資料編 考古3（奈良・平安時代）』千葉県。
- 寺村裕史 2014『景観考古学の方法と実践』同成社。
- 中村良夫 1977「景観原論」『土木工学体系13 景観論』彰国社。
- 森 郁夫 1988『畿内と東国 埋もれた律令国家』京都国立博物館。
- 山路直充 1999「関東地方の伽藍配置—8世紀以前について—」『シンポジウム古代寺院の伽藍配置』帝塚山大学考古学研究所。
- 山路直充 2000「下総龍角寺」『文字瓦と考古学』日本考古学協会第66回総会国士舘大学大会実行委員会。
- 山路直充 2004「『衣河の尻』と『香取の海』」『古代交通研究』13。
- 山路直充 2005「上総・下総の山田寺式軒先瓦」『古代瓦研究II』奈良文化財研究所。
- 山路直充 2009「寺の成立とその背景」『房総と古代王権—東国と文字の世界—』高志書院。
- 山路直充 2017「香取の海をめぐる寺社と郡家」『古代東国の地方官衙と寺院』山川出版社。

図表出典

- 第1図 筆者作成
- 第1、2表 筆者作成
- 第3図 梶原2017より引用
- 第4、6～8図 google map、QGISより筆者作成